

---

**タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。**

吏

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。

### 【Nコード】

N5911D

### 【作者名】

吏

### 【あらすじ】

完結しました『タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。』  
<http://ncode.syosetu.com/n2566d/>  
では書く機会に恵まれなかった人達の一面を見せます。本編を見た後の方が基本的に楽しめると思います。どのくらい続けるのかは未定です。また気長にお付き合いくださると嬉しいです。

## 【豊泉院カオルの場合】

### 【豊泉院カオルの場合】

「ねえ、豊泉院さんには気になる人とかいないの？」

「いきなり何の話だ。佐伯スミ」

斗葉高校生徒会長・カオルの後ろの席の女子が、そう問いかけてきた。このクラスの座席は出席番号順ではない。

「いないの？」

「いないな」

つれない返答をするカオルにスミがつまらなそうに、眉をひそめた。

「風紀委員が浮ついた気持ちでいられると困るな」

「やだなー、もう。公私混同、今はクラスメイト」

冗談交じりで言ったただらうカオルの言葉にスミがふふつと笑った。彼女は生徒会長様のファンクラブ会員でもなんでもない、普通に話せる女子生徒だった。

「それに風紀委員は愛しのカレがいるから入ったのー」

「3年の葛城タスクのことだな」

「知ってるのー？」

「知っているも何も、いつものろけているだろう」

あきれと諦めの表情を見せるカオルにスミが自らを抱きしめ、ほろりと陶醉している。

「やーん」

「異性との交遊を認めないわけではないが、節度だけは守るよう」

葛城タスクは警察剣道をやっていたこともある硬派な男子生徒で、風紀副委員長を務めている。大学受験のある忙しい身でありながら、スミとは3ヶ月ほど前から付き合っているそうだ。

「あのむれた面や籠手のにおいがたまらないのっ」

「そうか」

きゃーきゃー言うスミにカオルが表情を崩さず、やんわりと抑えた。顔や性格ではなく、まずあの夏場のきつい臭いから好きになっただけのだから人の好みというのはわからない。

「で、無敵の生徒会長様にはそういう人いないの。異性で」

「急に話が戻ったな」

他人の恋話というのは否応にも盛り上がるものであり、それが校内の有名なものなら人垣が出来てもおかしくない。

「いないな」

「いるでしょー、1人くらい。花の女子高生がー」

そういうことでくられても困る、とカオルはにべもない。スミはそれでも食い下がる。

「じゃあさ、男子でぱつと1番最初に頭に浮かぶのは誰？」

「一番最初に？」

「そー」

そうやって思い浮かぶ異性は、少なからず意識しているものだろう。スミにはその自信があった。カオルもすぐに答えてくれた。

「一番最初に出てくるのは学籍名簿の一番上、あ行だな」

「……ごめん、そういうことじゃなくて」

この全生徒・教師の名前などを完璧に把握しているという生徒会長様はどうにも手ごわい。聞き出したいところはそういう事務的なことではないのだが、カオルの言葉はとまらない。

「……名前は　　あい」

カオルの言葉がとまった。それとほぼ同時に遠くの方から、何か物音が聞こえた気がした。

「麻島タカシ、甲藤ミツル！　魔王か」

席を立ち、カオルがすつと教室から出て行く。何かまたしでかしたらしい、と察知したようだ。

「……ありゃ」

スミはその素早い動きに感心し、あきれていた。他クラスのこと

など放っておけばいいのに、と苦笑している。

「なんだかなあ」

同じようにスミは廊下に顔だけ出して、タカシ達と何かやりあっているカオルをのぞき見た。既に騒ぎを収め、厳重注意をしているところだった。

「ふーん」

以前より、カオルの表情がやわらかくなっているのは気のせいだろうか。1年の時からあった近寄りがたい、話しがたい頑<sup>かたく</sup>な雰囲気もほぐれているようだ。

「ああいうのも、ま、ありかな」

目を細めつつ意味深に微笑み、小首をかしげながらスミは教室のなかに顔を引っ込めた。その表情は、少しでも満足げなものだった。

## 【武島イズシの場合】

【武島イズシの場合】

「たあーけしまセンセツ」

昼休みの半ば、武島教師が廊下を歩いていると保険医の生方ナエ女医が声をかけてきた。そして、それにかまわない。

「あー、無視しないでー」

「忙しいので」

数学科の部屋に入ると、生方女医もするりとなかに入り込んだ。

武島はかまわず、無視して自分の席に着く。

「あなたにも仕事があるはずだが」

「ヒマなもんで」

えへへと笑う生方女医をじろりとにらみながら、机の上に大学ノートを広げる。

「いつ生徒が来るかわからないでしょう。早く戻ってください」

「だいじょーび。ただいまお留守です、ってフダをぶらさげておいたから」

何かあれば職員室の方に行くように、とも書かれてある。保健室に保険医が常在しているわけではない。

「感心はしませんかね」

「それがウワサの閻魔帳ですか？」

生方女医は注意を聞こうともせず、机の上に広げられたノートを武島教師の目の前からかすめ取った。「返さない」という言葉も耳に貸さず、へーほーとパラパラ斜め読みする。

「うつひゃー、ほんとに暗号で書いてあるう」

「……暗号ではありません」

何を書いてあるのか読むことが出来ないという閻魔帳について多く語らない武島教師が静かに、はつきりと否定した。

「じゃ、どこかの外国語？」

珍しい反応に生方女医は、出来る限り探りを入れようと訊いた。

「いいえ。ただ単に字が汚いだけです」

「え」

微妙な、何とも言い難い間が生まれた。さすがの生方女医も固まっ  
ってしまっている。その隙に武島教師が閻魔帳を取り返した。

「板書も苦手ですが、現国などとは違って文字を書くことは少ない  
ですからね」

数式や数字は字の汚さを自覚していれば、そう反映することはな  
い。閻魔帳に書いているのはどうしてマイナスなのか、数字以外に  
それを書いているから読めないものと言われているのだ。

「でも、武島センセはよく生徒さんの質問に答えてるじゃないで  
すか」

「ネットやメールを通してですね。ファックスもパソコンでうつ  
たものを印刷したのを送ってます」

キーボードなどでうつ文字では、字の汚さが出るといふのはあり  
えない話だった。授業も生徒に答えさせた問題の解説からはじめ、  
絶対に読めなくなる問題文を書くことを抑えていた。

「そんな理由だったんですか……」

「ボールペン習字で練習していますが、どうも成果が上がらませ  
ん」

意外な事実を生方女医は素直に驚いていた。読めない閻魔帳の答  
えがそんなシンプルなものというのを、今まで誰が想像した。

「それと、今この手にある閻魔帳は生徒のものではありません」

生方女医が斜め読みした限り、それはほぼマイナスが続いていた。  
加点無しとはいえ、そこまで続くのはよほどの落第生かそればかり  
集まるクラスだろう。

「いえ、これは自分の閻魔帳です」

「自分？」

「日々の自己評価というやつです」

更に驚いた。数学科の部屋は皆出払っていて、この2人以外いな

いからか武島教師も饒舌だ。

「もう少しわかりやすく教えられた、授業の時間配分。……年が終わる頃には自分の点など残っていません」

武島教師が生方女医に改めて自己評価の閻魔帳を手渡した。改めてなかを眺めるが、その読めない文章は自らに關しての改善点、反省点がびっしりと書かれているのだらう。

「最近、女子生徒の夜間外出を許可した上、自分のPCまで貸してしまいましたね。その日はマイナス10点です」

日付だけならかるうじて読める。9月14日だ。

「ありや、お堅いセンスにや珍しいですね」

「言い訳はしませんよ」

その女生徒は武島教師のお堅い理性を突破させ、行動に移させたのだからただものではない。

「何故か、学校長からも教頭からお咎めを受けませんでした」

「日頃の行いがいいからです」

その後、武島教師が報告したもののお咎めが無かったのは、女生徒が何らかの形で動いたことを知らない。知れば、ただちに武島教師は自分を罰することだらう。

「にしても、自分に対して赤点が多すぎないですか」

生方女医の言う通り、文字は読めなくてもマイナス数字だけはかるうじてわかる。ほぼ毎日つけられているそれは厳しすぎるほどだ。

「……現在の数学は難しすぎるんです。まず教科書からして、教え方が下手なんです」

「？」

勉強から遠く離れた生方女医には何のことかわからない。わかりやすい好例を、武島教師が思い出す。

「フランスでは九九を5×5までしか教えないそうです」

「えー、それじゃ9の段とかどうするんです？」

冗談と決め付ける生方女医に武島教師が不敵に微笑む。滅多に見られない表情だ。



「では、<sup>シチハ</sup> $7 \times 8$ を試してみよう。左手で7を、右手で8を指折りで数えてください」

生方女医が「えーと」とつぶやきながら、指を折ってみる。左の親指から折り始めて、最後には小指と薬指の2本が立った。右手も同じように親指から折り始めて、なか・薬・小指の3本が立つ。

「では、立っている指の数で足し算してください。折っている指はかけ算です。出来ますか？」

「バカにしないでくださいよう」

7を数えた左手で立っている指は2本、折っている指は3本。8を数えた右手は立っている指が3本、折っている指は2本だ。立っているのは $2 + 3$ 、折っているのは $3 \times 2$ 。

「立っている指の答えを10の位、折っている指の答えを1の位にすると」

「56だ」

$7 \times 8 = 56$ 。

「このように $5 \times 5$ より大きな九九は、幼稚園児や小学1年生のように指を折って計算すれば事足りるんです」

「え、ええー！　どーして、どーして出来るのぉ？」

生方女医は驚いている。他の九九も指折って試しており、81通りもあるそれを必死になっっておぼえたあの頃が悔しくて仕方ない、といった感じだった。

「……こんな風に数学はもっと簡単に教えられる。わざわざ難しい数式を丸暗記して・あてはめずとも、抜け穴のようなやり方もあるんです」

教科書通りにやるのが損とは言わない。そういったどうしてこうなるのかというのがわかる正しいやり方をおぼえてこそ、抜け穴が活きてくる。

「しかし、こうも難しいと思わせるような教え方ばかりするから、今の若い子供は数学が嫌いになっていくんです」

「……っはあー、そういうことですかあ」

武島教師の言葉に生方女医は感心している。確かに学年があがるごとに覚える公式や数式が増えて、それにとまって数学を嫌いになっていく子供が増えていくのは事実だった。

「生方先生、そろそろ保健室に戻ったらどうですか」

「そうですね」

昼休みもそろそろ終わる。九九のくだり辺りから、数学科の他の教師達も戻り始めていた。

「今日の午後は体育の時間もないし、ヒマなだけだなあ」

「こちらはまだ授業準備があるので」

九九などを話している間も武島教師の手作業は止まっていなかった。前日までにそのクラスに合った入念な授業準備をし、直前まで怠らない。個人の質問受け付けや進度具合による個別プリント製作を考えると、いつ寝ているのかと思うくらいだ。

「いやあ、今日は意外なことばかり知りました」

「そうですか」

読めない閻魔帳の秘密、武島教師の自身と数学教育への憂い、いずれもお力たい授業態度からは想像もつかないことばかりだった。

「こういうところを生徒さんに知ってもらえば、センセの人気は上がると思いますよ」

「余計なことは教えるつもりはありません」

小首をかしげウフと微笑む生方女医の言葉を、武島教師はきっぱりと切り捨てた。

## 【甲藤ミツルの場合】

【甲藤ミツルの場合】

ある昼休みのことだった。

「タカシって巨乳好き？」

「いきなりなんだよ」

危つく吹きそうになったお茶を置いて、ミツルをにらんだ。

「朝来野さんって意外とあるなー、と」

「どこ見てんだ」

「ワシがジャージを借りた時もそう思ったぞ」

男の会話に魔王がずいっと割って入ってきた。女子は遠巻きにやーねー、などと言っていそうなものだ。

「魔王さんも興味あるんだ」

「うむ。胸部の小さい大きいは一番わかりやすいセックスアピールじゃしのう」

じゅーとバナナジュースを一口飲み、魔王は軽くうなずいてみせる。

「朝来野さんはCはあると思うね。ちなみに魔王さんのカップ数は？」

「つけてない」

がたたんとタカシが突っ伏した。ミツルもどん引きだった。

「フン。ワシの大きさ程度じゃ要らんじやろ」

「大きさは別として付けておいた方がいいぞおっ、魔王おお！顔を真っ赤にしながらアンナが飛び込んできた。

「せ、せめてか、形を保つためにもおおっ！」

「そういうものかのう。どうもアレはわずらわしくていかん」

「アンナはBだっけ」

ミツルがいけしゃあしゃあとバラすと、アンナが半泣きになってその肩をつかんで揺さぶった。

「ミミミミツルは大<sup>お</sup>つきい方が好きなのかあああああつ！」  
「うん。『小さいのを気にしてる』のがいい」

H A H A H A H A とマニアックな発言をするミツルを、アンナが思い切り抱きしめた。

「ミツルにふさわしい女に私はなるぞおおおおおつ！」

「うるせーよ」

うんざりしたようにタカシがつぶやく。この2人に合わせていたらきりがない。

「豊泉院会長はEかFくらいあるよね」

「なにっ」

魔王がいきなり対抗心を燃やした。しかし、まったく勝負になっていない。

「この学校で一番ムネがでかくてスタイルいいよ。対抗馬は他校でもそうはいないね」

「モデル並だよなああつ！」

都心のように頻繁なスカウトがあるわけでもなし、本人もお堅いオーラ出しているので近寄りがたい。

「八鍬副会長は魔王さん以上アンナ以下のB、書記の瀬川さんはお腕型でCだね」

「うぬ、皆ワシよりでかいのか」

見た目は小学生並の魔王がじとつと見上げる。やはり悔しいなどと感じるところはあるのだろう。

「しかし、甲藤は変態か？」

「ミツルは変態じゃないいいいいいっ！」

「うるせーよ」

アンナが必死に否定するが、じとにらむ魔王の目は冷たい。

「仮に変態じゃないにしても、いくらなんでも詳しすぎぬか？」

アンダーとトップでわかるバストサイズを知っているということ  
は、個人情報レベルを知っているといっても差し支えない。本人も  
教えたがるものではないだろう。

「詳しいっていつでも、せいぜい同じ超・生徒会のメンバー内くらいだよ」

「まあ、やつらにはファンクラブがあるからにそのくらいの情報流出は……」

魔王の言葉が止まった。ミツルの台詞に違和感を覚えたからだ。

「……聞き間違いか？」

「何がさ」

「甲藤」

有無を言わさぬ魔王のプレッシャーにミツルが肩をすくめた。

「まだ言ってなかったっけ」

タカシの方を見るミツルだが、向こうは知らん顔している。

「言え」

「……超・生徒会の庶務やってます甲藤ミツルです」

ミツルは素直に言ったつもりなのだろうが、魔王はまだにらんでいる。困った顔をしながら、タカシに助けを求める。また無視されたようだ。

「だって俺がいなくてもあの4人で超・生徒会はやってけるしさ

」

「もう少し早く言わぬか」

魔王の言葉にミツルは近くの自分の席に戻り、座った。

「早く言って魔王さんに何のメリットがあるの？」

「敵の懷に身内があれば、うまく利用することを考えるじゃろ」  
その行動をとって、敵にばれるなどした時に身内がどうなるかも考えなければ動いてはくれないだろう。それと知ってかミツルはH  
A H A H A H Aと笑っている。

「まーね。でも、必要な時はちゃんとメンバーとして動くよ。文化祭みたいなイベントには中心になって参加しなきゃなんないし」  
庶務の仕事は主に雑多の事務が基本であるが、その程度のことは無敵の生徒会長様がついでにやってしまう。仕事を取ってしまうのではなく、ミツルが来る前に終わってしまうことが多いのだ。

「ま、ま、イベント期間は忙しいよ。地域や他校と接触して提携を持ちかけたり、向こうのそういうポスターを預かったりね。ベルマークは集めたことないや」

ミツルの幅広い情報網はここからきていたのだろう。他校や地域との交流や接触の機会だけなら生徒会長様より多いが、最終的な判断・指示は彼女を仰ぐことになっている。だが、それも電話があれば事足りてしまう。

「校内にとどまらないのが俺の仕事なわけ」

「都合のいい解釈じゃのう」

超・生徒会の窓、外交官などと称すると聞こえはいいが、実際は生徒会室に滅多に寄らない問題役員だ。

「まあ、庶務であれなんであれ、変態には変わりねーけどな」

「うむ」

「あ、やつぱり？」

「ミツルは変態なんかじゃないいいいいいい！ 人よりも好奇心が強いだけなんだああああああっ！」

流石に同級生の個人情報、バストサイズまで把握しているのはおかしい。ミツルがH A H A H A H A H A H Aと笑ってごまかし、  
たところで昼休み終了のチャイムが鳴った。

## 【麻島ミカコの場合】

### 【麻島ミカコの場合】

昼も過ぎ、人通りもまだ無い頃合だった。

「小腹がすいたねえ」

ミカコはのんきにそうつぶやいた。昼飯は食べたが、店に出て身体を動かすとおやつが欲しくなってくる。

甘いのはなかったねえ、そういえば。

買ってきたその日に魔王がほとんど食べてしまつようになったので、今すぐつまめるようなちよいどいいものは残っていないだろう。「流石に買いに行くほどでも……」

今は店にミカコ1人、店を閉めるわけにもいかない。

「じゃ、作っちゃまうかね」

その手があった。店を閉めるわけでもないし、台所にいるから客が来てもすぐに対応出来る。商店街のなか、店頭の野菜を白昼堂々盗もうとするわけもない。

「うんうん」

ミカコはうなずいて、店の奥へと引つ込んで台所へ向かう。

「薄力粉と砂糖、卵に牛乳」

それと深皿2枚か耐熱ボウル、金ざるとどこの家庭にもあるもので、甘いもの好きなら口元が思わず緩んでしまつものをこれからつくる。

「カスタードクリームでもつくろうか」

突然の客が来ても大丈夫なように、鍋の火にかけるような本格的なものをつくれないのわかっている。ミカコはこれから電子レンジでそれを作ろうというのだ。

「深皿に薄力粉大さじ2、砂糖大さじ3を混ぜる」

砂糖は出来上がりの色に関係してくるので白が良いが、黒でも味は同じだから気にしない。

「混ぜた粉に牛乳200mlを入れる」

だまをつくらないように、少しずつ入れるといい。だまになりにくい薄力粉というものも売っているから、それを使うとより作業が楽になる。

「それにとき卵を1個分・全部入れて、また混ぜる」

卵は白身と黄身をはしでよく混ぜてから、入れることだ。濃厚な味が好みなら卵黄だけでつくってもいいのだが、余った白身が勿体無いのでミカコは一緒に入れてしまう。

「金ざるでこす」

そうするとだまや白身が引つかかってくるが、気にしないならやらなくてもいい手順だ。しかし、ミカコはカスタードクリーム好きなので割と気にするのだった。

「こしたのをラップにかけて電子レンジで、600Wで2分間チン」

その間に使った皿や道具を洗う。手馴ればここまでくるのに5分くらいしか、かからない。

「チンしたら1回取り出して、また混ぜる」

混ぜたらもう一度レンジに入れ、今度は30〜40秒かける。終わったら、また取り出す。

「そのたびに混ぜる。合計で3分（最初の2分+40秒+40秒）超えると何かかたまりのようなものが出来るけど、気にしないで混ぜる」

ここで面倒だからと言って最初から3分レンジにかけてはいけない。長時間入れると出来損ないのプリンのようなものになってしまう。

「火を使う手間を省くぶん、このくらいは我慢我慢」

気長に30〜40秒の加熱を4〜6回ほど繰り返してくると、ただの黄色い液体だったのが段々クリーム状になってくる。やりすぎると出来損ないのプリンになってしまうので、ほどほどにとどめておく。



「おっと、バニラエッセンス忘れてたよ」

ミカコが一滴振りかけ、また混ぜ込んだ。いつ入れても大丈夫、とミカコは気にしない。

「出来た」

所要時間は15分もかかっていないのに、あつという間にカスタードクリームが出来てしまった。火を使わないから、小さな子供でもつくれてしまうレシピだ。

「さて、お次はパンだね」

冷蔵庫に入れ、冷えて固くなった食パンを取り出し、深皿のふちの上に乗せて30秒チンする。こうすればトーストではない、焼きたてのように柔らかくなる。わざわざ深皿でやるのは、平皿でやるとパンの裏に蒸気がこもってべちよべちよになるからだ。

「一口チヨコが残ってれば、一緒に乗せて溶かしたのにねえ」

面倒な湯煎なんてしない。ただ食パンの上に2個ほど乗せて、一緒にチンすればとろとろにとけてくるのだ。

「うん」

おいしそうな湯気の出る食パンに出来たてのカスタードクリームをのつける至福の時間だ。保存料など一切使わないカスタードクリームは人肌の時が一番雑菌が繁殖しやすいので、食べない分は冷蔵庫に入れてしまう。

「いただきます」

ミカコが一口それを食べ、にんまりと笑ってしまう。店に出ていた時の疲れなどすぐに吹っ飛んでしまう。

「冷やしたのも好きだけど流石に待てないものねえ」

熱々のパンに冷えたカスタードクリームがとけていくのもたまらない。ミカコは更に一口食べた。

……おやおや。

聞き覚えのある足音が近づいてきたのに、気づいたのだ。

「ただいまっ、ミカコ何か食べておらぬかつ」

「おい、いきなり何言ってんだ」

魔王とタカシが学校から帰ってきたのだ。魔王が家のなか走るのをタカシが追いかけて、止めにきたというところだろう。

「おかえり」

「ミカコ、何を食べておるんじゃ」

「カスタードクリームとパンだよ」

「ワシのぶんはっ」

「ちゃんとあるよ」

ミカコは自らのパンを全部口に入れてしまい、立ち上がった。あのカスタードクリームレシピは結構な量が出来る。

「魔王、お前ほんといい加減にしるよな」

「ミカコ、すぐ食べてもいいか」

「うがいかしてきな。その間に用意しといてあげるから」

タカシが「無視してんじゃねーよ」と言うが、魔王は聞く気がない。さつと洗面所に飛び込んでいった。

「ったく、魔王のやつはしょうがねーな」

「タカシはいるのかい」

「おれはいーや。店出てる」

素っ気ない息子にふつと微笑み、ミカコは電子レンジに食パンを2枚入れた。持っていけば店先で食べるだろう。

おいしいものはみんなで食べるのが一番さね。

ほっと笑顔になる幸せで甘い家族の味を、ミカコは楽しめた。

【麻島ミカコの場合】（後書き）

実際につくれるレシピです。ぜひお試しください。

まだ何か不安な方は『簡単 カスタードクリーム』とネット検索すればそれらしいのが引っかかります。

【常木えなの場合】

麻島青果店前、夕方より少し早い時間。

「ヒマじゃのう」

そう堂々と魔王が口に出した。

「うるせーよ」

その横で野菜の入った段ボール箱を持っているタカシが、その力で魔王を小突いた。

「ワシの呼びかけに応えんとは平民どもめ」

「勝手言っな」

ぎゃあぎゃあと言い合う2人を、その横でミカコがあっはっはと笑っている。

「ぬう」

魔王が下を見ると、ぎゅっとその服のすそを幼児がつかんでいる。2、3歳くらいの、女の子だ。

「タカシの隠し子か？」

「オイ」

「この商店街の子じゃないねえ」

ミカコが傍に寄り、しゃがんで見ると魔王の後ろに隠れてしまっ。ひざこぞうをすりむいているが、泣きもしない様子だ。

「おや、魔王ちゃんが好きなんだね」

「小学生ぐらいの姉がいんじゃないかねーの」

「フン。タカシのくせに言いおるわ」

確かに見た目は小学生高学年ぐらいの魔王だが、タカシと同じ高校に通う女子高生だ。

「近くに親らしき人はいないねえ」

「ちよーどいい。懐かれてるし、魔王、親探しに行つて来い」

人通りのない表通りを見て、タカシが道をびしっと指差して言う。

「なんでワシが。こういうのはロリコンのタカシに行かせるべきじゃろ」

「なに吹聴してんだコラ。しかもお前そついうことをロリコンなんかに任すなっ」

「認めおつたわ」

「違いーよ！」

また始まった2人の言い合いをぼけつと見ている幼児の服に触つて、ミカコが「迷子札もないねえ」とつぶやく。

「頼むよ。魔王ちゃん。お店はいいから」

「ぬう」

「風呂上りのアイス、もうひとつサービスするから」

「行くぞ、幼児」

「氣イ変わるの早えーよ」

幼児がきゅつと歩き出した魔王の指を握るのを見て、ハツとする表情を見せる。

「……フン」

幼児のすりむけたひざこぞうがうつすらと光り、治っていく。タカシがそれに気づいて、「素直じゃねーな」とにやつと笑う。

「あれが魔王ちゃんの力かい」

「『支配』する力だと。土地でも人でもなんかの優位に立ってりやそれらを押し潰すことも、助けることも出来るそーだ」

何度もその力で言い様にやられていることにタカシの思い出し怒り、ミカコが笑って、しんみりと「早く母親が見つかるといいねえ」と言う。

「さて」

幼児を連れて立っている魔王、人の目がそちらを向かず無視されている感じた。そんななかで見覚えのある顔を見つけた。

「甲藤、それとアンナか」

「魔王さん。タカシは？ 遊びに行くところなんだけど」

「魔王おおつ！ その子は誰だあぁっ！」

熱く叫ぶアンナに魔王が片耳をふさぐ。隣を歩くミツルも首をか  
しげ、それを避ける。

「その子、タカシの隠し子？」

「否定されたがこれから証拠を挙げに行くところじゃ」

甲藤ミツルと魔王が話しているところに、アンナが目をきらきら  
させながら幼児に近づく。魔王が釘を刺す。

「……食うなよ」

「そんなんじゃないあぁいっ！」

シヨックを受けた表情に魔王へ抱きつこうとするアンナをひらり  
と避け、べしやとひざをつく。

「かわいいなー」

ミツルが幼児を見て微笑む姿を見て、地べたに座り込んだままの  
アンナがいきなりもじもじしながら言う。

「み、ミツルウウウ……そのおお、そんなに私達の子供が欲  
しいかぁあああぁっ！」

言って恥ずかしいーっ、というポーズをアンナが取るがミツルは  
がんとして無視。すべてアンナの独り相撲で終わった。

「おぬしは冷たいのう」

「なにがー？」

幼児と戯れて楽しそうにしているミツルと、落ち込んでいるアン  
ナの対比を魔王がじいーっと言っている。

「あ、迷子だったんだ」

幼児・魔王と並んで歩くミツル、彼の腕を絡め取って駄々をこね  
るアンナの目立つ4人組。

「うむ。親探しじゃ」

「これだけ騒がしいメンバーのなかにいるのに気づかないってこ  
とは、親は反対側にいるんじゃない？」

今歩いている方向、小規模の商店街の逆方向を指差すミツル。今

歩いている方向はちなみにミッル達が歩いてきた方向でもある。

「名案がある」

魔王が人差し指をピツと上に向け、自慢げに話そうとする。そこにまた声をかける制服姿の女子高生。

「魔王、甲藤ミッル、日向アンナか。どうしたんだ」

「そちらこそ、勇者のなかの勇者が商店街に何用かのう」

唐突の出会いだがバチバチツと魔王の一方的な火花を散らす。その痛すぎる視線を避けもせず、幼児の方に気づく。

「迷子か」

「見ればわかるじやろ。そしておぬしの目的も丸わかりじゃぞ。よほどタカシが愛しいのじゃな」

「変な噂を立てるのはやめてくれないかな。そういう憶測でものを言うのは感心しない」

「なら今すぐUターンするのじゃ。口だけでなく行動を変えるがいい」

敵対心剥き出しの魔王と淡々と返すカオル、ミッルがやれやれとため息をつきながら言う。

「ウチの生徒会長様と魔王さんは相変わらずだね」

「勇者と魔王は敵同士だからなああつ！」

ミッルがどう收拾付けようかと面白そうに見ていると、幼児が魔王の指を強く握る。それで魔王が我に返る。

「おお、おぬしと言い争っている場合ではないわ」

「親探しなら手伝うよ。その子の名前は？」

「おぬしには話さぬ」

「魔王さんも知らないそうです」

「わかった」

協力を申し出るカオルに魔王は反発するが、ミッルが口を挟むなどのフォローもしつつ魔王をなだめる。

「具体的には？」

「商店街の皆さんに協力を仰ぐ」

カオルがたたつと近くの店に駆け寄り、挨拶をすると店の人がここにことしながら対応する。

「……どういうことだああああっ、ミツルウウウッ！」

「この商店街にある連絡網を使わせてもらうんだよ」

店の人が電話をかけると、すぐ次の店に繋がり、それがどんどんと広がっていく。

『名前はわからない、服の特徴、3歳ぐらいの幼児の親を探している。商店街のなか、麻島青果店まで来てほしい』

「これだけ（商店街の人が）早く動いてくれるのは斗葉高校に超生徒会がこの人あり、無敵の生徒会長と言われるだけの知名度と信頼があつての芸当だね」

ここの商店街にスピーカーがないので、連絡網であれば労力も少なくてすむ。

「凄いなああっ！」

感心するミツルとアンナ、むくれている魔王。

「ワシがやろうとしていたのに……」

「ちよつと遅かったね」

ミツルが言っていると、魔王がおぬしらと話していたせいじやと言い返された。ミツルは首をすくめる。

「麻島青果店に行こう」

カオルが戻ってきて、先導する。憮然としている魔王が幼児を連れてそれを追い抜く。苦笑するミツルとアンナもついていった。

麻島青果店の前で談笑する皆、魔王は幼児をじつと見ている。

「……えなちゃんっ」

母親らしき人が駆け寄ってくると、幼児がとてととそれに近づいていく。

「ダメじゃないのっ、勝手に離れてっ」

怒鳴られ、びくつと首をすくめるえなちゃんが火がついたように泣き出した。



「ああもう、この子は。どうも皆さん、お騒がせしました」

「走って捜してたら肉屋さんに声かけられて」とぺこぺここと謝る母親、えなちゃんは泣き放しでいる。ミカコがいえいえ、と言う。

「ちよつと目を離しただけで、もう、本当にすみません」

母親が泣くえなちゃんの手をぐいぐいと引き、麻島青果店から離れようとする。

「その母親、待て」

魔王が止めに入り、母親が振り向く。

「それ以上、そのえなに当たるべきじゃない」

「……何ですか」

「えなを連れ、親を探したのはワシじゃ」

母親がそうですか、とつぶやく。

「この子のためにありがとございます」

「礼など要らぬ」

きつぱりと言う魔王、母親があっけに取られている。

「えなに謝れ」

「何を」と母親が喋るのを魔王が遮る。

「目を離したのはおぬしじゃ。責<sup>せき</sup>はおぬしにある」

母親がなんなの、と魔王をキツとにらむ。

「えなは一言も口をきかなかった。ひざこぞうをすりむいても齒を食いしばって、おぬしに再び会えるまで泣くのを我慢しておった」

ぎゅつと魔王の指を握り締めていたえなの姿。

「今のご時勢に、子供から目を離してどうする。片時も離れてやらないのが親ではないのか」

ぎりと魔王が唇をかみ締める。

「現にこんなワシなんかのあとについてきてしまうくらい、不安で、どうしたらいいのかわからぬ子をどうして目を離す」

「フンと魔王が下からがんをつけるように、にらむ。」

「大方、どこぞの知り合いと出会って話しこんだんじゃろ」

凶星を刺されたのか、わなわなと母親が震え、思わず怒鳴った。  
「わたしはこの子を必死に捜してましたっ」

「どうでもいいわっ！ それに必死なら、何故頼ろうとせぬっ」

魔王の剣幕に母親が退きかける。

「おぬしは周りを何故頼らぬのじゃ」

「周りって……」

母親が辺りを見ると商店街の人達が集まってきている。

「ただ一言、子供がいないことを誰かに話したか」

「バカじゃないの、アナタ。……見知らぬ人に話せるわけないじゃない」

腕を組み、母親はそっぽを向く。

「そうか。おぬしは恥をかきなくなかったのじゃな」

「な……」

「ある教師から教わった言葉じゃ。『聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥』」

数式を黒板に書きながら、ある教師はいつもそう言う。

「一言、一言でもここににいる者にそれを聞けば、早くなくとも話は広がる。1人で捜すよりずっと早く見つかるじゃろ」

「それは……」

「言えばおぬしは子から目を離れたダメな親として周囲から見られよう。しかし、聞かず誰にも頼らずして子を失う悲しみを負うよりはずっといいとは思わぬか」

不穏な社会の、黒く怪しい手や影にえなちゃんがさらわれてしまうイメージがありありと脳裏に浮かぶ。

「そうなれば、後で泣いて周りを訴えたところでどうしようもないじゃろ」

「もう見つかったからいいでしょっ」

「それは結果としてじゃ！」

魔王が母親を見つめる。過ぎた今を「もし」で語ることに意味は無い。しかし、結果によっては「もし」でしか学べないこともある。

「世のなかまだ捨てたものじゃないぞ。悪人より善人の方がまだ多い。少なくとも、この商店街のなかにえなをさらうやつはおらぬ」

半泣きのえなが母親をじつと見て、それから魔王を見る。

「悪人がさらうより先に、多くいるこの者がえなを見つけてくれだろう」

母親がきよろきよろと周りを見て、齒を食いしばる。

「たった一言の恥で、おぬしはこれだけの味方を得ることが出来たのじゃ」

魔王がタカシ、ミカコ、商店街にいる皆の顔を見る。

「??」

母親をにらみつける魔王が、ふと気づく。力強く、いつの間にか回り込んでいたえながその服のすそをつかんでいる。最初の時とは違う。

抗議しとるのか。

これ以上お母さんをいじめないで、と魔王に訴えているのだ。そして、今浮かべている涙は母親に叱られたから出ているものではないのだろう。

「……とはいえ、結果的にこれだけの面前でワシはおぬしに二重に恥をかかせた。それは謝ろう」

優しいえなの頭を撫でてから、ぺこりと深々と魔王は頭を下げた。

「じゃから、えなを泣かせんでくれ」

「……っ」

複雑そうな表情の母親がえなを見て、小刻みに震えている。言いたいことは伝わっているはずだ。

「気持ちわかるけど、魔王、それじゃ駄目だ」

すっと一歩前に出る力オル、その言葉を聞いて魔王が頭を上げる。「えなちゃんのお母さん、お騒がせして申し訳ありませんでした。」

商店街の皆さんに協力を仰いだのは私です」

無敵の生徒会長も頭を下げ、その状態で少しだけ顔を上げ、視線を母親にやる。その表情は不敵そのものだ。

「これからも、どうぞ白斗商店街の方をごひいきに願います」

あっけに取られる周囲、タカシは額を押さえ、ミカコはにこにこしている。母親はくつと踵を返す。

「二度と来ないわ……っ」

えなの手を引き、捨て台詞を残して周りを押しのけるように母親が去っていく。拍手も歓声も何も起きることはなかった。

翌日。なんとなく物思いにふけっているような表情を魔王は見せている。タカシが軒先でヤンキー座りをしながら、ダンボールに色々な野菜を詰めこんでいる。

「えなちゃんのことか」

ちろつとタカシの顔を見て、魔王がふうつとため息をつく。

「……一発で名前を覚えおったか、このロリコンめ」

「あれだけ騒ぎや誰だっておぼえるわっ、しかも昨日のことだろーがっ」

ねぎを持つて憤るタカシを見て、魔王がふうつと長いため息をつく。それを見てタカシはまた座り、魔王の方を見ずに言う。

「なんか昨日は大演説だったな」

皮肉をこめてタカシが話しかけると、魔王がうむと応える。

アルデミマシユムイダ

「隣の次元におった頃から、ワシには両親の記憶が無い。……じやからかもしれん」

「そうか」

「あの小さな掌のように、ワシも祖父の指を握っておったんじゃろっか」

既に忘れてしもったわい、と魔王が青空を見上げて言う。タカシが自転車に季節の野菜入り段ボール箱を載せる。

「えなは、また来てくれるじゃろっか」

「母親共々二度とウチには来ねーんじゃねーの。あんなこと言われちゃ」

呼び込みする前にか、とがくつと魔王が肩を落とす。昨日からだ  
が、魔王の呼び込みでは客が入っていないらしい。

「トライアングルに行つてくら」

奥から「あいよー」とミカコの声が返ってくる。魔王がふと通り  
を左から右へと見てみる。

「まー」

とてとてえなちゃんが魔王のところに向かって歩いてくるのが  
見える。そのすぐ後ろにはあの母親がいて、自転車に乗りかけたタ  
カシもその状態で固まって・止まっている。

「おおっ」

嬉しそうに魔王がえなちゃんを抱き上げる。母親が敵意とも何と  
もいえない表情と目でそれを見ている。意地悪そうに魔王が、母親  
の顔を見ずに言う。

「二度と来ないんじゃなかったかのう」

母親がフンとえなちゃんを魔王から受け取り、抱きかかえる。

「……二度とあんなことにはさせないけど、もしかた恥をかくな  
ら……知らないことより、もうすでに恥をさらされたところの方が  
いいと思っただけよっ」

えなちゃんがぎゅーっと母親の髪をつかみ、幸せそうにニコニコ  
としている。魔王とタカシが目配せして、タカシは自転車にまたが  
つてこぎ始め、魔王がにやっとなつて言う。

「よくぞ参った、このワシが住まう麻島青果店に」

がくつとタカシが自転車から落ちるような反応を示し、母親もば  
かんとしている。

「だ・か・ら、参れとかそんな呼び込みで客が入るかっ。フツー  
に、らっしやい・でいーだろ」

「魔王たるもの普通ではいかんのじゃっ」

ぎゃあぎゃああとくだらないことで言い合う2人に、ミカコがなん

だなんだと出てくる。呆然と2人を見てあきれた表情を見せていた  
えなの母親が、くすつと笑った。

「あー」

母親の笑顔を見て、上機嫌にえなも笑う。

どんな時代でも、子供が笑顔でいられることこそ何よりのものだ。

【常木えなの場合】（後書き）

前回からだいぶ間が空いてしまいました。  
今度はいつになるのだろう……。

えなちゃんは本編には出ていません。念のため。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5911d/>

---

タカシと愉快的な学友共めひれ伏すがいい。徒然なるままに。

2010年10月14日19時15分発行